新型コロナウイルス感染症対策

ご理解とご協力をお願いいたします。

動画配信のお知らせ

新型コロナウイルス感染症の拡大によって停滞した芸術活動を応援するために、岐阜県教育文化財団が行っている「岐阜県文化芸術活動応援助成事業」の一環として、今回の演奏会が開催されております。

動画配信という形でも幅広く楽しんでいただけるよう、演奏会1か月後を目安に、YouTubeにて本演奏会の模様を配信する予定ですので、どうぞそちらもお楽しみいただけましたら幸いです。

岐阜チェンバー
ホームページ

岐阜チェンバー
Twitter

次回の定期演奏会のお知らせ

第44回定期演奏会　2021年11月7日(日)

於）OKBふれあい会館 サラマンカホール

岐阜チェンバーアンサンブル
第43回 定期演奏会

2020年12月26日(土)
午後1時30分　開演

於）サラマンカホール

岐阜県文化芸術活動応援助成事業

ごあいさつ

本日は岐阜チェンバーアンサンブル第43回定期演奏会にご来場いただき、誠にありがとうございます。今年は新型コロナウイルス感染症の拡大により、公私ともに多大なる影響を受けた方も多くいらっしゃるのではないかと思います。音楽業界でも、状況を踏まえ涙を呑んで演奏会を中止・延期とした楽団が数多くあります。幸いにして我々の団体は、演奏会当日までの期間が長かったこと、吹奏楽器ではないこと、比較的少人数であることなどの条件もあり、感染拡大に留意しながら練習に取り組むことができ、本日を迎えることができました。

さて、今回のプログラムはよく「定番」「名曲」と言われるような３曲を揃えました。バロック・古典派・ロマン派と、3つの時代にまたがった様々な表情の音楽をお楽しみいただこうと思っています。特にブラームスに関しては、元々は6人で演奏する室内楽曲です。合奏にするとまた全く違った表情を見せてくれます。

大変な状況の中、ご来場いただいた皆様には、団員一同感謝の気持ちでいっぱいです。どうかお身体には充分ご自愛ください。本日の演奏会、最後までごゆっくりとお楽しみいただけましたら幸いです。

岐阜チェンバーアンサンブル

プログラム

[1]　モーツァルト　＃ ディヴェルティメント K.136

[2]　ヴィヴァルディ　＃ 調和の霊感 第10番

～　休憩　～

[3]　ブラームス　＃ 弦楽六重奏曲第１番（合奏版）

近年の演奏会の記録

第３６回 定期演奏会 2013.6.15 じゅうろく てつめい ギャラリー	・J.S.バッハ：ブランデンブルク協奏曲　第3番 ・ヘンデル：合奏協奏曲　ト長調 Op.6-1 ・ヴィヴァルディ：《四季》より「秋」 ・ベートーヴェン：弦楽四重奏曲第9番より第3楽章 ・ジョン・ウィリアムズ：シンドラーのリストのテーマ ・堀江幹雄編曲：四季のメドレー ・モーツァルト：アイネ・クライネ・ナハトムジーク
第３７回 定期演奏会 2014.6.1 じゅうろく プラザ	・ヴィヴァルディ：調和の霊感　第10番 ・J.S.バッハ：ヴァイオリン協奏曲　第2番（独奏：山口豊） ・ブリテン：シンプル・シンフォニー　Op.4 ・芥川也寸志：弦楽のための三楽章《トリプティク》
第３８回 定期演奏会 2015.11.15 サラマンカ ホール	・ヴィヴァルディ：調和の霊感　第4番 ・ヴィヴァルディ：《四季》より「冬」 ・グリーグ：ホルベルグ組曲　Op.40 ・チャイコフスキー：弦楽セレナード　Op.48
第３９回 定期演奏会 2016.11.20 サラマンカ ホール	・ホルスト：セントポール組曲　Op.29-2 ・ヴィヴァルディ：《四季》より「夏」 ・レスピーギ：リュートのための古風な舞曲とアリア ・スーク：弦楽セレナード　Op.6 ・ピアソラ：リベルタンゴ（アンコール）
第４０回 定期演奏会 2017.12.10 サラマンカ ホール	・ウォーロック：カプリオール組曲 ・ヴィヴァルディ：調和の霊感　第1番 ・ブリテン：シンプル・シンフォニー　Op.4 ・ドヴォルザーク：弦楽セレナード　Op.22 ・ドヴォルザーク：ユーモレスク　第7曲（アンコール）
第４１回 定期演奏会 2018.11.18 サラマンカ ホール	・エルガー：弦楽セレナード　Op.20 ・モーツァルト：ディヴェルティメント　K.138 ・バーバー：弦楽のためのアダージョ ・J.S.バッハ：2つのヴァイオリンのための協奏曲 ・ヴィラ=ロボス：ブラジル風バッハ　第9番 ・山田耕筰：この道[藤掛廣幸編]（アンコール）
第４２回 定期演奏会 2019.10.22 サラマンカ ホール	・フィンジ：弦楽のためのロマンス ・J.S.バッハ：ブランデンブルク協奏曲　第3番 ・J.S.バッハ：ブランデンブルク協奏曲　第4番 （独奏Vn：村中一夫、リコーダー：①岩田龍明　②宮崎紗耶加） ・バルトーク：ルーマニア民族舞曲 ・ヤナーチェク：弦楽のための組曲 ・シベリウス：アンダンテ・フェスティーヴォ(アンコール)

岐阜チェンバーアンサンブル

岐阜チェンバーアンサンブルは、昭和47年に県内唯一の弦楽アンサンブルとして結成された市民楽団です。 結成から45年近くにわたり、弦楽合奏の愛好家の集まりとして岐阜市内で継続して活動してきました。 バロック音楽を基調に、ロマン派や現代音楽にも積極的に取り組んでいます。

1st Violin

2nd Violin

Viola

Violoncello

Contrabass

Cembalo

団員募集のお知らせ

私たちと一緒に活動をしていただけるメンバーを募集しております。月に２回(第２･第４日曜)17:30～20:30に，岐阜市内のコミュニティセンターで活動しています。

※現在ヴィオラ・チェロ・コントラバスパートを募集中です。

岐阜チェンバーアンサンブルホームページもご覧ください。

http://gifuchamber.web.fc2.com/

ディヴェルティメント 二長調 K.136
ヴォルフガング・アマデウス・モーツァルト

Wolfgang Amadeus Mozart
[1756 - 1791]
オーストリア（ザルツブルク）
古典派音楽（ウィーン古典派）

ディヴェルティメント（divertimento）の語源は、イタリア語の「divertire（楽しい、面白い）」という言葉である。モーツァルトらしいエッセンスが凝縮されたディヴェルティメントK.136は、彼が16歳の年（1772年）に故郷ザルツブルクで作曲した３部作（K.136～138）の第１作にあたる。ただ、この３部作は、いずれもディヴェルティメントに欠かせないメヌエットが見られず、モーツァルト自身もこれらの曲をディヴェルティメントとは呼んでいないため、後世になってモーツァルトの自筆譜に誰かが書き加えたものだと考えられている。娯楽的な音楽というよりはシンフォニックな性格を有した作品となっており、３曲を作った場所も含めてザルツブルク・シンフォニーと呼ばれている。

第１楽章：Allegro

第１ヴァイオリンによる明るく清々しい主題が、この楽章を特徴づけている。爽やかな名旋律で始まり、展開部では短調の部分も現れて陰影を形成している。

この楽章の冒頭は、2015年より東武東上線池袋駅の発車メロディとして採用されている。（多くの人が行き交う駅において「ひとときの癒し」を感じてもらうことが目的とのこと。まさにうってつけの爽やかさである。）

第２楽章：Andante

テンポの速い１・３楽章の間にあって、ほっと一息つくような楽章である。伸びやかに歌うような美しい趣きを感じさせる。途中で第１楽章の冒頭の主題が取り入れられており、楽章間の結びつきが意図されている。

音楽教育家の斎藤秀雄は、門下生達にアンサンブルの緻密さと音楽の魂を伝えるための題材としてこの曲を取り上げていた。その薫陶を受けた小澤征爾がセイジ・オザワ 松本フェスティバル（旧称：サイトウ・キネン・フェスティバル松本）のアンコール曲として、しばしば採用している。

第３楽章：Presto

１・２楽章とともにソナタ形式の楽章となっている。跳ねるような序奏に続いて、ここでも第１楽章の冒頭の主題が形を変えて登場する。その工夫が作品の性格の統一感を高めている。その後、第２主題がフーガのように絡み合って展開をする。

※ソナタ形式…基本的に「序奏・提示部・展開部・再現部・結尾部」という形の楽曲構成のこと。

※フーガ…語源は「逃げる」を意味するラテン語。決まったメロディーが様々なパートに登場して追いかけ合う。

調和の霊感 第10番 ロ短調 RV580
４つのヴァイオリンとチェロのための協奏曲
アントニオ・ルーチョ・ヴィヴァルディ

Antonio Lucio Vivaldi
[1678 - 1741]
イタリア（ヴェネツィア）
バロック音楽後期

ヴィヴァルディが残した協奏曲は450曲におよぶといわれる。「調和の霊感」と題した作品3は、1712年にヴィヴァルディの最初の出版として刊行された曲集で、12曲の弦楽器の協奏曲から成る。大部分は、司祭の職にあるとともに、ヴェネツィアの女子孤児院の音楽学校における指導者も務めたヴィヴァルディが、この学校の女子合奏団のために作曲したと考えられている。

この10番ロ短調は、バッハが4台のチェンバロのためのコンチェルトに編曲したことでも知られている。曲ごとに強烈なキャラクターを刻み込む才に恵まれたヴィヴァルディだが、この曲全体を貫く情感はある種の悲哀、嘆き、とはいっても決して柔弱なものではなく、厳しさと芯の強さを持ったものだ。

4本のソロ・バイオリンに加え、２部に分かれたヴィオラ、そしてチェロをあわせれば7本の弦楽器にソロのパートがある。ヴァイオリンが一人ずつソロを受け渡すほか、複数のソロ楽器の掛け合い、それに全奏と、弦楽器のみで可能なかぎりの多様な質感・色彩感が駆使されている。

全体は大きく3部に分かれ、急-緩-急の楽章構成をとる。

第１楽章：Allegro

トゥッティとソロが交替するリトルネロ形式。普通はトゥッティから始まり、トゥッティで終わるが、この曲ではソロがトゥッティのリトルネロのモチーフを予告する。

※トゥッティ…イタリア語で「全部」を意味する。全奏者による合奏。

第２楽章：Largo

サラバンドのリズムの全奏で始まる。ソロと全奏の交替ののち、中間部ではソロ・ヴァイオリン４本がすべて異なるパターンで分散和音を一斉に奏でる。きわめて特異なオーケストレーションである。ヴァイオリンの音色の最後にラルゴがもう一度回帰し、終楽章に続く。

※サラバンド…バロック音楽にみられる、３拍子の荘重な舞曲。２拍目と３拍目がしばしば結合され、付点音符のリズムが多用される特徴がある。

第３楽章： Allegro

第１楽章よりいくぶんの緊張感をはらんで進んでいく。少ない楽器がそれぞれの役割を果たしているのがよくわかる。モーツァルトのロンドのように軽快に駆け抜け、スピード感あふれる音楽である。

弦楽六重奏曲第１番 変ロ長調 Op.18
ヨハネス・ブラームス

Johannes Brahms
[1833 - 1897]
ドイツ（ハンブルク）
ロマン派音楽

ブラームスが27歳（左の写真がちょうど27歳当時のもの）のときに作曲された、若々しく情熱的な傑作である。弦楽四重奏曲の分野では、ベートーヴェンの残した16曲の重圧により、40歳になるまで曲を発表することができなかったが、弦楽六重奏曲においては、古典派の巨匠たちに同様の曲種がなかったという気安さから、若くしてこの第1番変ロ長調を残すことができた。またヴィオラやチェロを好み、重厚な響きを好んだブラームスは、2本ずつにふえたヴィオラ・チェロの声部を自在に書くことにより、厚みのある響きや陰影豊かな叙情性を表現することに成功している。

第1楽章：Allegro ma non troppo

若々しい情熱を感じさせながら、何故か昔を懐古しているような雰囲気も感じさせる、いかにもブラームス！といった作品。冒頭から登場するメロディーの一息が長く、気持ちを高揚させるとともに爽やかな印象を与えてくれる。それとは対照的に、短く問いかけるような第２主題がとてもチャーミングである。

第2楽章：Andante ma moderato

第１ヴィオラから始まる力強くロマンティックな旋律が名高い。この楽章は、最初の主題と６つの変奏から構成されており、情熱的な音楽が堰を切ったように自在に展開される。ルイ・マル監督のフランス映画『恋人たち』で用いられていることでも知られる。

また、作曲者自ら「主題と変奏 Op.18b」として作曲の同年、ピアノ独奏曲に編曲をしている。親交の深かったシューマンの元妻クララの誕生日に献呈された。若き日のブラームスが、人知れずクララへ寄せていたという熱い思いを感じ取ることができる。

第3楽章：Scherzo.Allegro molto – Trio.Animato

陽気な気分のスケルツォ楽章。トリオの部分はもはや踊りだす勢いである。

※スケルツォ…イタリア語で「冗談」の意。楽曲の性格を現し、特定の形式や拍子テンポに束縛されないが、一般的に３拍子で速めのものが多い。

※トリオ…中間部のこと。３声部で書かれることが多かったことから。

第４楽章：Rondo.Poco allegretto e grazioso

終楽章のロンドは、終始幸福な気分に満たされたまま進んでいく。転がるトリルや軽やかなピツィカートがこの曲の心地よさを生んでいる。最後は効果的な伴奏の掛け合いに乗ってテンポを上げていき、熱狂的に締めくくる。